

映画「Noise ノイズ」「こどもしよくどう」マスコミ完成披露試写会



出演者とスタッフが自己紹介のカードを持ってフォトセッション。
前列左から、監督の松本優作、山本理恵役の安城うらら、桜田美沙役の篠崎こころ、大橋健役の鈴木宏侑、山崎役の来何侑希、後列左から、上司役の仁科貴、高橋役の小橋賢児、理絵の父親役の布施博、音楽プロデュースのbanvox、深雪役の川崎桜、美沙の父敏夫役と撮影監督の岸健太郎。

「Noise ノイズ」

松本優作監督 25 歳の初長編作品『Noise ノイズ』のマスコミ向け完成披露試写会が、2 月 12 日、秋葉原にある「アキバシアター」で行われた。秋葉原はこの作品の舞台となった街で、ロケを行った街でもある。完成試写会をこの縁の地で催すのは、主催者として感慨ひとしおに違いない。

この作品はすでに海外の映画祭にノミネートされており、国内では 2017 年の SKIP シティ国際 D シネマ映画祭にもノミネートされている。

今回の試写会では、さらに編集などに手を加えた劇場公開版が紹介された。公開は 3 月 1 日から「テアトル新宿」でロードショー、順次全国で上映される。

松本監督は舞台挨拶で、この作品は 2008 年に秋葉原で起きた無差別殺傷事件をモチーフにしているが、ちょうどその時期に、親しかった私の友人が自殺をしてしまった。

当時 15 歳だった私は、事件とは直接関係ないのだが、ショックで落ち込んでしまい、映画を創らなければ生きていけない、という思いでこの作品を製作した。

この映画の舞台は、今やポップカルチャーの聖地といわれ、世界的にも有名な若者の街、秋葉原である。

あの忌まわしい殺傷事件で母親を失った娘と父親が細々と暮らす家族を軸に、秋葉

原でひた向きに生きる様々な若者たちの生活を描いた群像劇である。

彼らは働けど報われない人々で、それぞれの生活ぶりが横断的に早いテンポで描かれている。

運送会社で上司に叱られながら、黙々と荷物の仕分けをしている暗い表情の青年は、母親が残した借金返済に追われており、幸せそうではない。一方、父親と二人暮らしの娘は高校生で、地下アイドルのライブ歌手を目指しているが、最も感じやすい年頃



2019 年 3 月 1 日（金）よりロードショー！
テアトル新宿順次全国

中山 秀一



完成試写会で挨拶をする松本優作監督

で、異性である父の心遣いを毛嫌いして、家出をしてしまう。

一向に報われない暗い性格の運送会社のバイト青年は、うつぶんを公衆電話ボックスの中から発信している。やがて彼は出刃包丁を、やくざのように畳に突き差し、その出刃包丁を抜いてタオルで巻き、いざ行動を起こすのではないかという場面があり、観客には、例の殺傷事件の心情を暗示しているように思える。

家出していた年頃の娘は、真の愛を求めた挙句に裏切られて大いに傷つき、父親のもとに戻ってくる。

以前の行動を反省してか、食事の用意などを始めるが、照れくさそうでこちない。それでも父親は、少し成長して戻ってきて



2019 年 3 月 23 日（土）岩波ホールにてロードショー、ほか全国順次ロードショー
監督：日向寺太郎 / 出演 藤本哉汰 鈴木梨央 浅川蓮、古川凜、田中千空 / 降谷建志、石田ひかり 常盤貴子 吉岡秀隆

くれた娘に涙する。

やや希望が見えるこのシーンで、映画は終わる。

この映画は、リアリティを狙ったものだが、デシーンの映像はその殆どが、白っぽいハイキートンで表現されている。

映画はリアルな内容だが、映像には淡い

オブラートをかけて、どぎつい映像表現を和らげているようにも思える。

音楽は従来の常識を覆すような強烈なサウンドである。試写会の案内には、「現代社会の明と暗をあぶり出す強烈な色と光の映像に、人気 DJ・banvox が、心底作りたかったというサウンドがリンクする」と解説

されている。

この作品を観ると、最近頻発する反社会的な犯罪と共通する問題を提示しているように思われる。若者たちにも共感が得られる映画だと思う。

『こどもしょくどう』

「子ども食堂」は、現在全国に2,000か所あると言われる。「貧困や家庭の事情で満足に食事がとれないとか、1人で淋しく食事をする子供たちに、無料または低額で食事を提供する取り組み」、と新聞記事などで解説されている。

現在は、貧困や孤独対策としてだけでなく、地域のコミュニティの場として、その運営形態は地域の役所や企業、住民たちの協力により全国に広がっている。

この映画は、一つの「子ども食堂」が誕生するまでを、小学生の子供たちの行動によって実現するという、心温まる物語りとして描いている。したがって映画で活躍するのは、殆どが子供たちで、子役たちが微笑ましい演技をしている。

映画の舞台は、スカイツリーが見える下町で、二人の子供を持つ夫婦が、人情味豊かな小さい食堂を営んでいる。夫婦は、時々大きな声で言い合うが、「人情」という方向は同じで、下町食堂のよき主人だ。

二人の子供は、上の息子が小学5年の高野ユウト（藤本哉汰）と、可愛い妹と、両親の4人家族である。息子ユウトは少年野球のリーダーで、幼馴染のタカシの面倒をよくみている。

このタカシはやや小太りで身体は大きい、言葉による表現が苦手、学校でもいじめにあっている。しかも、この子の家は育児放棄の母子家庭で、ひとり孤独に部屋で食事をとることが多い。ユウトの両親は、そんなタカシを心配して、たびたび夕食に呼び、居間で息子たちと食事を共にさせている。

ある日、ユウトはタカシと共に通学の途中で、河川敷に放置されたボックスワゴンの軽自動車を見つける。そのワゴン車で、姉妹が父親と車中生活をしているのに出会ってショックを受ける。

映画には、姉のミチルがコンビニで万引きして、店長に尋問されるが、奥さんが不憫に思い、商品を持たせて解放してくれるという、下町ならではの人情場面がある。

後日、ユウトはタカシを連れて、店で作ってもらった弁当を、ワゴン車の姉妹に届けるが、ユウトはその弁当の手渡し役をあえてタカシにやらせた。タカシは身近に不幸な姉妹と接し、自分の境遇を考えたのだろうか、いくらか自信がついたようだ。

そのうちに、ワゴン車の父親も失踪してしまい、車は悪ガキどもの破壊対象になって、ペコペコに壊されてしまう。

あまりに可愛そうな姉妹に同情したユウトは、両親に頼んで姉妹を呼び、家庭の温かい食事を与える。妹のヒカルは素直に喜ぶが、姉のミチルは中学生くらいの微妙な年頃で、複雑な心境である。しかし、ユウトの母の心遣いに、実の母を感じたのか、ミチルもようやく心を開く。

実は、かつて姉妹の家族は幸せで、伊東温泉のホテルに泊まり、展望デッキから夕日を見ている回想シーンが示される。その夕日には、紅色の雲がかかって輝く美しいシーンである。

ユウトは決心したように、店のレジを開けて売上金を盗みだし、姉妹を、この伊東のホテルに招待すると、夢のような行動に出る。豪華展望車に乗ってホテルにたどり着き、両親が宿泊しているか尋ねるが、それは夢にすぎなかった。

帰宅後に、河川敷のワゴン車を訪ねると、何と向こうにパトカーが止まっている。姉妹は警察に補導されて、署の建物に入るが、間もなく児童相談所の職員二人に連れられて出てくる。その兇相の職員の何と冷たい表情か、暖かく受け入れるという気持ちがまるで感じられない。

姉妹が、兇相の車に乗せられて走り出すと、ユウトが必死に走って追いかける。姉妹が社内から見守ると、走るユウトの背後には、夕日に輝く紅色の雲が現れ、姉妹の幸せを期待しているようだ。

表現べたでいじめられていたタカシは、今回の件ですっかり自信を取り戻し、学校では自分をいじめていた相手を、廊下になじ伏せてしまうという変わりようだ。

舞台となった下町食堂では、今回の経緯を受けて、「小学生以下は無料」と書いた貼り紙を加えた。

ついに「こどもしょくどう」の誕生である。これから先、地域の恵まれない子供たちの心を癒す交流の場として、その役割を果たすに違いない。

下町食堂の両親役を演じた吉岡秀隆さんと常盤貴子さんは、さすがのキャリア役者だけに、その演技は安心して観ることができて気持ちがよかった。

過半の時間を占める子どもたちの演技は、全員しっかりしている。子どもたちがこの映画を支えていると言える。

Syuichi Nakayama
日本映画テレビ技術協会名誉会員